



目 次

大学図書館と驚愕の記憶（橋本 哲哉）	2
新入生歓迎特集 若手教員に聞く読書と図書館のとおきの話	3
自然科学系図書館の新営と附属図書館三館体制への経緯について	7
図書館のトピックス	
医学部分館バリアフリー化第一歩	8
総合科目のご案内	8
としょかん日誌（2005年1月～2月）	8



自然科学系図書館の外観

大学図書館と驚愕の記憶

附属図書館長 橋本哲哉

おおよそ半世紀前の話で恐縮だが、多少私事にもわたることをお許し願いたい。

私が大学の門をくぐったのは、1959年の春であった。東京の生まれ育ちだったので、大学のキャンパスにたどり着くのに苦労はなかったが、その環境の中での全く新しい経験に、はじめは大いに戸惑った。

大学はそれまでとは格段に違った自由な時間と空間を用意して待っていた。校門前の喫茶店にまず立ち寄り、何時間も粘って授業までの暇をつぶしたり、相手次第ではそのまま自主休講としてデモにいつてしまったこともある。時あたかも1960年安保の時代で、東京には刺激的で、やや乱暴な空気が満ち満ちてもいた。また気に入った講義は欠かさなかったが、興味の沸かない教室からエスケープする自由もあった。私の通った中学・高校は友人たちのそれと比較して大変に大らかな学校であったが、それでも朝から夕方まで、時間割に沿った堅苦しい生活を強いられていたのだから、やがてその自由さを満喫するようになった。大学におけるこうした「生活の自由設計」は、最初の驚きと喜びだった。

大学生活に慣れてきて次に驚いたのは、図書館の大量な蔵書である。中学・高校の図書室は今しきりに思い出そうとしているが、目には浮かんでこない。人並みには本を読んでいたが、兄たちの小説類を借りて満足していた程度であった。大学図書館の書庫に足を踏み入れた時、その図書・資料群に圧倒された気持ちを今も鮮明に記憶している。1年次の終わり頃には、やがて所属するだろう教授の研究室に入れてもらえるようになったが、その専門図書・史資料群とそれらを紐とき講釈する先輩・院生たちは「知的な満足感」を日常的に付与する、まさに驚愕を覚えるような存在だった。あれから約50

年、あのような新鮮な驚きの瞬間を感じる機会が次第に少なくなり、いささか寂しい。

翻って、金沢大学は「生活の自由設計」と「知的な満足感」という感覚を学生諸君に与えるため、どの程度の役割を果たしているだろうか。広大な角間キャンパスは自然空間には富んでいるが、一旦キャンパスに入ると限られた施設しかなく、喫茶店で友人たちと談論風発というわけにはいかない。自由さを味わうには物足りないだろう。しかしながら、そこに用意されている自然は一級品と言ってよい。大学からジャスコ店に至るまでの丘陵地帯で、それを「角間の里山」と称して教育と研究の場に利用し、そして地域との交流の場としても積極的に活用したいと考えている。その前線基地とすべく、白山麓から江戸時代中期の民家を移築して建てたばかりである。このように美しい再生古民家を持っている国立大学は他に例を見ないので、大いに利用してほしい。

金沢大学図書館の環境・蔵書は全国国立大学ベストテンに入る水準だと自己評価している。全学には170万冊の和・洋書群、中央図書館1万平方メートルの建物、医学部分館は100年を超える歴史的蓄積を擁している。加えて、本年4月からは自然科学系図書館もオープンした。建物は5千平方メートル、そして大量な電子ジャーナルの利用の便宜を提供している。ここは新設間もないので機能が整っていないところはあるが、3館全体を通して見て、私が体験したような「知的な満足感」を十分に享受できる大学図書館だといってさしつかえなからう。そこへ新入生諸君たちが期待を持って飛び込んで来ることを願ってやまない。

(はしもと てつや)

新入生歓迎特集

若手教員に聞く **読書**と**図書館**のとおきの話

現在の研究分野
趣味
学生におすすめの本(タイトル・著者)、
できればその理由など
学生時代などの、読書や図書館利用に
まつわる話
新入生へのメッセージ

森 雅秀 (文学部)



比較文化，仏教文化史
ウォーキング

『アビ・ヴァールブルク

伝 ある知的生涯』

E. H. ゴンブリッチ著 鈴木
杜幾子訳 晶文社，1986

ドイツの文化史家アビ・ヴァールブルク(1866 - 1929)についての評伝で、著者もイギリスの高名な美術史家です。ヴァールブルクはイコノロジー(図像解釈学)の提唱者に位置づけられるとともに、ヴァールブルク文庫(のちのウォーバーク研究所)の創設者としても知られています。個人の蔵書から出発したこの研究所は、現在では美術史における世界有数の研究センターとなっています。この研究所のユニークな点のひとつは、既存の分類法によらず、ヴァールブルク自身の関心にしたがって本が並べられていることです。蔵書とはその持ち主の知のあり方をも示すものなのです。

80年代後半にロンドン大学に留学していた私は、このウォーバーク研究所の南に位置するカレッジ SOAS に所属していました。ここの図書館には東洋学関係のすぐれた蔵書があります。他にもロンドン市内には大英図書館の分室であるインド省図書室や、百年以上の伝統を持つ王立アジア協会がありました。また少し足をのばせばオックスフォードやケンブリッジの大学図書館にも、東洋学の豊富な文献資料が所蔵されています。これらの閲覧室の暗い照明の下で、サンスクリット語の写本やチベット語の文献を読む日々を過ごしていました。

本学が誇る文献コレクションに暁烏敏文庫があります。その蔵書数は5万冊を越え、このうちの半分以上が仏教関係の文献です。この分野での北陸地方随一のコレクションであるば

りではなく、他では見ることのできない稀覯書も、そこには数多く含まれています。私自身は、仏教関係の個人蔵書として宇井伯壽、梅尾祥雲、羽田野伯猷などのものをこれまで見てきましたが、質量いずれにおいても暁烏文庫はこれらを凌駕しています。暁烏文庫は附属図書館の地階で、誰でも自由に閲覧できる状態で保管されています。ぜひ皆さん自身の目と手で、その知のあり方にふれて下さい。

長峰 伸治 (教育学部)

臨床心理学 映画・ビデオ鑑賞

恥ずかしながら、私はこれまでテレビ・ビデオ・パソコンなど映像媒体に接する時間のほうが多く、読書をあまりしてこなかった。その意味で、この原稿を書くのには不適當な人間である。そんな私だが、大学生・大学院生時代、図書館をよく利用した。

大学生の前半は、学期末の試験勉強・レポート作成で図書館を利用した。図書館の自習用の机に向かうと集中力が切れることがなかった。静かで本の匂いがする独特の雰囲気、それと真剣に机に向かっている他の学生達から醸し出される緊張感によって、自分の中のやる気が呼び覚まされ、充実した気分になった。また、このころ読んだ本では、大学1年生の初學者ゼミで課題として読むことになった『氷点』(三浦綾子著)が印象深い。登場人物の心理描写が丁寧であり、人間の心の表と裏、それらがさまざまに絡み合ったストーリーで、図書館の自習机で珍しく短時間で読んだ記憶がある。

大学生後半から大学院生にかけては、研究を進めていく上での文献探しに格闘した。今はインターネットや電子ジャーナルなど、図書館に行くことなく文献の入手や検索が可能であるが、私の学生時代は、一つ一つ生の文献を図書館に出向いて探さなければならなかった。自分の研究領域・テーマに関係した目当ての文献がなかなか見つからなかったり、ざっと目を通してコピーした論文が後でじっくり読むと実は期待していたほどではなかったり、と試行錯誤の連続だった。時間と手間のかかることであったが、そういう過程で、いろいろな本に目を通して、探しているのとは別の内容や別の論文に

目が止まり、それがきっかけで思いもよらず有益な情報を得たり、自分のテーマが深まったりすることも多々あった。

私と同じように読書をあまりしない人、あるいはインターネットでの便利さに慣れてしまった人も、まずは自らの足で図書館に出向いてみることをお勧めしたい。図書館に身を置くことで没頭・集中できる静かな時間を体感でき、自分の手と足と目を使って本に触れてみることで意外な発見や刺激を得ることができると思う。

石田 道彦（法学部）

社会保障法 映画鑑賞

『エリック・ホフファー自伝 構想された真実』 エリック・ホフファー著 学校教育をほとんど受けず、港湾労働者をしながら思索を続けた哲学者の短い自伝です。おもしろくて一気に読みました。

『会社はこれからどうなるのか』岩井克人著 ライブドア問題などから株式会社の仕組みに興味を持った方は読んでみてください。私もこんな風に講義ができたらいいなと思っています。

大学生の時はE.S.S.に所属していたので、ディベート大会の資料を集めるために、図書館はよく利用しました。しかし、教養部時代のゼミの先生のアドバイスにもかかわらず（こだま第145号を参照してください。）、古典をゆっくり読む機会をつくりませんでした。大学院に進学してから後悔しました。

本にはお金を惜しまないようにしましょう。

正木 響（経済学部）

世界経済の中の旧仏領西アフリカ
『百年の預言 上・下』 高樹のぶ子著
朝日新聞社、2000年

新入生向けということで、金沢に関係のある小説を紹介したい。本書のキーワードは、金沢、楽譜に隠された謎、ルーマニア革命、そしてオーケストラ・アンサンブル金沢。最近、ロシアや周辺諸国で、有名政治家の不審な死や暗殺未遂がニュースになっているが、ベルリンの壁崩壊以前の秘密警察や市民社会の様子を伺い知れるという意味でも、おすすめである。

世界経済論という専門柄、各国の図書館を訪れる機会は少なくない。この原稿も南仏の図書館訪問中にメールで依頼されたのだが、本日

訪問した図書館ではコピー機が壊れていて、デジカメと手書きで資料を写すことになった。他にも似た様な経験はある。とあるアフリカの国では、コピーを依頼したら、「紙がないので自分で調達してきてくれないか。」と言われたり、別の国では、予算不足で設備が整っていないところへあふれんばかりの学生が押し寄せ、椅子が足りず、コピーをするお金すら持ち合わせない学生が貪るように立って本を読んでいる姿と、その熱意に十分応えられない大学図書館の貧困さに愕然とした。

出身大学院の図書館は、経済関係の書籍が充実していることにかけては日本屈指であった。私の専門は、我国では研究者がほとんどいない極めてマイナーな分野であるが、「これはさすがにないだろう。」と思うような書籍やワーキングペーパーがOPACでヒットし、小躍りしたことも少なくない。誰が利用するのかわからないような書籍や雑誌の購入を長い年月をかけてしてくれていた母校への感謝の念は、卒業後、他の大学図書館の現状を知るにつれ強くなってきた。独立行政法人化後、元国立大学では予算カットの嵐が吹き荒れているようである。しかし、「仏作って魂入れず」にだけはなっけたくない切に願う次第である。

新聞（短期の視点）、雑誌（中期の視点）、書籍（長期の視点）からバランス良く知識を吸収し、他者を説得するに足る「自分の視点」を形成してください。外国雑誌にも目を通すと、世界が広がります。

内橋 貴之（理学部）



生物物理学 読書
『脳とセックスの生物学』
ローワン・フーパー著、
調所あきら 訳

"The Japan Times"に連載されている科学コラム "Natures Selection"から抜粋、加筆訂正し訳出したもの。生物学の最新の興味ある研究成果を非常に分かりやすく紹介しており、理系・文系にかかわらず生物学に興味がない学生にもお勧めの本です。

『お言葉ですが ~ 』高島俊夫著
「週刊文春」に連載中のコラムから抜粋・追記したもので、タイトルどおり言葉に関する様々

な話題（起源，誤用，新語）について豊富な知識と歯切れよい文体で書いています。日本語をまっとうな感覚を持って使うことは大学生として重要です。

図書館には多くの蔵書があることはもちろんですが、静音環境，冷暖房完備も大きな特徴だと思います。私の学生時代にはもっぱら試験勉強のための場所として利用していました。自宅で勉強するよりも図書館の適度に緊張した雰囲気の方が集中できたものです。試験期間に入ると多くの学生が出入りし，机の争奪戦や静穏環境も破壊されることがままありましたが。。時間が有り余る夏休みには，図書館で一日ぶらぶらし避暑と読書を兼ねて有意義？に過ごしていました。研究室配属されますと学術雑誌の検索に暗い雑誌書庫をうろうろして目的の雑誌を探すのに苦労しました。今は電子ジャーナルが発展したので図書館に行くこともあまりなくなりましたが。

大学生活でもっとも重要なことは，卒業してから後悔しないことです。私などは，“もっと勉強しとけばよかった…”，“せっかく暇だったんだから，お金を貯めて海外放浪の旅でも行けばよかった…”，“あれをすればよかった…これをすればよかった…”。後悔することばかりです。4年間をどのように過ごすかで，その後の人生が一変します。長期的視点に立った計画を立てて過ごしましょう。そのために図書館でじっくり考えるのもいいのではないのでしょうか。

日比野 由利（医学部医学科）



公衆衛生学，社会医学
読書（論文読みではなく）
『自殺論』 デュルケム著，宮島喬訳 中央公論社 1985

ヨーロッパ諸国の自殺率が社会的統合の強弱と関連すると論じた社会学の古典的著作である。

『不平等が健康を損なう』イチロー・カワチ，ブルース・P・ケネディ著 西信雄，高尾総司，中山健夫監訳 日本評論社 2004

社会の相対的な経済格差が抑圧を産み出し人々の結合を弱め，社会成員の健康や寿命にネガティブな影響を及ぼすと結論づけたものであ

る。これらの文献は，文化的・社会的コンテクストが個人の心的現実という回路を通してヒトの有機としての性質や生物学的側面を決定づけていくことを示した点で興味深く，重要であると考ええる。

大学院では，書籍の貸借や研究論文の収集のために図書館を利用した。電子ジャーナルは当時の私の研究領域ではまだ一般的ではなく，また発表年の古いものをしばしば必要とした。大学図書館の「地下書庫」に入るのを許されたのはこの頃であった。図書館の地下部分の広大な領域には，幾層にも書棚が並んでおり迷子にならないよう注意さえ必要であった。また，その場所は埃が堆積し日に焼けた製本済みの雑誌論文の匂いが充満していた。はじめ，図書館といえば，誰もが立ち入りを許されている地上階のみから成るものであると思っており，「地下書庫」という世界が地下に広がっていきよとは思わなかったので，「地下書庫」の存在は私に軽い驚きを与えた。そうして，書棚の片隅から目的の論文を見つけ中身を概観して，わざわざ足を運んだことに値するような論文であると判断すれば，満足を覚えた。またそうでなくとも，当該論文は私がこうして書庫を訪ねて見つけて読まなければ，他の誰にも省みられることがなかったのではないかと考えれば，めったにない出会いのようでもあり自己満足を覚えることができた。当時，大学図書館に欲しい文献がなければ，他大学まで出向いていかなければならなかったが，幸い「地下書庫」には膨大な蔵書があり，多くの文献を書棚の片隅から見つけ出すことができた。そういう意味で，大学図書館は私には頼りがいのある存在であった。また同時に，図書館の能力には相対的格差があるとも感じた。近年，電子ジャーナルの普及によって情報や研究資源へのアクセスの方法が変容しつつあり，またそれは情報の偏りを平準化していく方向に作用しつつあると思われるが，これからもメディアとしての図書館は情報の源として，多様なアクセス方法に開かれていく方向に欲しいと思う。

学生には，必要とする情報を，的確に迅速に引き出し，新たな知として創造的に活用する能力を獲得してもらいたい。図書館（ホームページも含む）を多く訪れて，図書館の利用の仕方に習熟することがそのための近道の一つであると思う。

石垣 靖人 (薬学部)



生命科学
読書と雑談
さしあたり司馬遼太郎が
好きで、中でも『坂の上
の雲』と『ひとびとの聲
音』が清明で好みにあ

ますし、お薦めできます

私は本学の卒業生で、当時金沢城内にキャンパスがあり、講義の合間にはよく城内をぶらぶらしていました。どこからか楽器の音色や発声練習が聞こえたりする入口から足を踏み入ると、静かで落ち着いた図書館がありました。そのうち足繁く通うようになり、書架の間をさまよいつつ、いろいろな本を読み散らかしました。ポーリングの化学結合論などは、よく理解できないくせに何かに惹かれて何度も手に取ったものです。

薬学部の専門的な講義や実習が増えると忙しくて図書館へあまり行かなくなりました。そのうち、ある講義を受けていたときに先生のお話が理解できないことがありました。先生はいつもまして熱心に話されるのですが、どうしても背景にある何かがわかりません。暗記さえすれば試験は合格できたのですが、ついにフラストレーションに負けて久しぶりに図書室で専門書を読んでみました。はじめはちんぷんかんぷんでしたが、我慢して読んでいるうちに書かれている薬の作用機構が何となく分かり始めました。と、突然先生が何をおっしゃっていたのかははっきりと判ったのです。実は先生は教科書の枠をこえて研究成果を話していたのですが、専門書の知識と合わさって隅々まで私の理解が行き届くと共に、作用機構を調べた研究者の探求心に衝撃すら覚えました。ひとつの薬の働きを調べることのおもしろさが私にも伝わった瞬間でありました。この時の興奮が、やがては研究の道へ進むひとつのきっかけになったのではないかと思うことがあります。

ご入学おめでとうございます。図書館は何かを調べるためだけに行くところではありません。何となく一人でぶらぶらするところでもあります。知識はインターネットで高校生でも集めることができますが、大学生に必要な知恵は図書館で独り過ごす時間や経験に基づく様々な対話からはぐくむもののようにも思います。ど

うか、せっかくの自分を大切に育てていってください。

香川 博之 (工学部)



スポーツ工学
畑仕事とスポーツ
『岩波数学公式 ~ 』
森口繁一・宇田川近久・
一松信 岩波書店

いくら授業で新しい理論やモデルの考え方を習っても、数学嫌いの私にとって式の変形、積分、などは大問題でした。時間を大きくロスするだけではなく、ときには解析自体をあきらめるということがよくあったのを思い出します。こんなときに出会ったのが、ここで紹介する公式集です。自分が考えつく程度のモデルの解析に必要な公式であれば、たいてい3冊のどこかに載っています。数値計算を多用するようになったご時勢ですが、いまだにたいへん重宝しています。みなさんも、自分だけの数学者を書棚に招待してはいかがでしょうか。

ルーズでしかも思いつきで行動することが多かったので、図書館の利用時間外によく無理を言って入れていただいたのを思い出します。最新の論文はほとんど学科の図書室のようなところであって、今はいつでも参照できますが、私が学生のころは図書館に行かないと閲覧できませんでした。無理を言った見返りではありませんが、人手不足のときに搬入や並べ替え、文献複写依頼の書類作成などを手伝っていました。これからは、ネットで文献を手に入れられる時代がくるようですので、図書館のイメージも変わってくるんでしょうね

実験レポート作成などで、高学年になればなるほど利用機会が増えると思います。授業で指定されている参考書などは多くの方が使いますが、返却期限を守らなかつたり、ときには紛失したりする心無い利用者がいたりして、困っている学生を見かけることがあります。自分だけでなく、他の学生も気持ちよく効率的に利用できるように心配りをしましょう。また、必要な書籍が見つからないときには司書の方に積極的に相談するといいですよ。

自然科学系図書館の新営と附属図書館三館体制への経緯について

野 村 洋 子

この4月、角間II地区に自然科学系図書館が竣工し、附属図書館は中央図書館・自然科学系図書館・医学部分館の三館を中心としたサービスを開始した。この三館体制にいたる経緯を遡れば、昭和60年3月8日付け総合移転実施特別委員会報告の中の、『附属図書館新営構想(金沢大学の図書館機構は、中央図書館、自然科学系図書館、医学部分館で構成される)が了承された』へ辿り着く。この時はまだ、金沢大学が角間地区へ移転する前であり、移転反対論議が活発な中、ここに記された「自然科学系図書館」などは遠い将来の漠とした話であった。それが20年目にして実現したこととなり、感慨深い。

『附属図書館新営構想』での三館の役割は

- (1) 中央図書館：総合図書館機能，学習図書館機能，文系学部を対象とする研究図書館機能，保存図書館機能
- (2) 自然科学系図書館：自然科学系の研究図書館機能を中心とし，専門課程学生のための学習図書館機能も備える
- (3) 医学部分館：医学系の研究図書館及び学習図書館機能 となっている。

新営に向けての具体的な活動の開始は、平成8年度「自然科学系図書館新営に関する小委員会」の下に「ワーキンググループ」が設置されたことによる。平成9年度、そのワーキンググループの策定した『自然科学系図書館新営整備計画構想概要』が図書館委員会において承認され、運用・サービス内容が具体的に示された。

平成12年度には『金沢大学附属図書館の将来について』が図書館委員会にて承認され、三館の役割を次のように規定した。

- (1) 中央図書館：管理部門（総務，図書雑誌等の発注・受入・整理等）を集中し，中央図書館機能（連絡調整，対外図書館との渉外，その他）を果たすと同時に人文・社会科学系図書館及び人文・社会科学系学術雑誌のバックナンバーセンターと

しての機能を果たす

- (2) 自然科学系図書館：自然科学分野の資料及び情報の拠点としての役割，自然科学系学術雑誌バックナンバーセンターとして資料の共同利用・共同保存を推進
- (3) 医学部分館：医学分野の資料を集中的に収集・保存・提供し，県内の医療情報の拠点を旨とする。また他の地区の医療情報ネットワークと連携し，教育研究及び医療情報提供の発展に寄与する

また組織的には、「自然科学系図書館は，中央図書館と同じ角間キャンパスにあるため，分館とはしないで中央図書館の一部とする」とした。

平成13年度には，文部科学省からPFI導入による附属図書館棟新営の可能性が示唆され，調査の結果，自然科学系図書館の新営は国立大学附属図書館としては最初のPFI事業となり，15年度に着工，16年度に竣工の運びとなった。図書館棟は自然科学本館と一体化し，食堂や売店，大小の会議室などが設置され，学生・教職員等が集う，憩いの場ともなるであろう。

法人化後の大学において，附属図書館に対する要請はますます多様化している。教育・研究へのさらなる支援と共に，地域に開かれた施設として，三館が互いに連携しつつ，課せられた上記の役割を確実に果たしていかなければならない。開館までの20年間の道のりを思う時，利用者の方々に支持される附属図書館となるよう，職員一同力を合わせて，日々仕事をしていく所存である。

(自然科学系図書館サービス内容の詳細については，附属図書館のホームページ <http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/> 又は「ひかり」No.165をご覧ください)

(のむら ようこ 図書館サービス課)

図書館のトピックス



医学部分館バリアフリー化第一歩

医学部分館では、玄関入り口の自動ドア化と身障者用トイレの増設を行いました。これまでは風除室と玄関にあった2枚の狭い扉を手で押し開けなければ入館できませんでしたが、今後は自動ドアをお通りいただけます。また、玄関前スロープにある排水溝に蓋を付けましたので、車椅子でも通れるようになりました。これまで



なかった身障者用トイレの増設と合わせ、車椅子の方にも、快適にご利用いただけるようになります。また増設工事とともに、

旧型化していた冷暖房システムの取替えも済ませました。効き目の薄かった書庫にも冷暖房が効くようになり、より快適な環境が整いました。

総合科目のご案内

「大学図書館への招待 - みずから学ぶ、図書資料を楽しむ - 」

今年度も図書館では主に1～2年生を対象として総合科目を開講します。前期15回で2単位、定員は60名です。

図書資料についての講義やコンピュータを使用しの実習、図書館にある辞書や参考資料を用いる調査演習、図書館自体の利用法など、図書館についての幅広い内容の授業です。皆さんの今後の学習・研究にきっと役立つことでしょう。

第1回 はじめに - 大学図書館の役割

第2回 附属図書館オリエンテーション(見学)

- 第3回 学術情報と大学図書館
- 第4回 論文・レポートの書き方
- 第5回 気の利いた情報システム
- 第6回 学術情報の探し方(1)
- 第7回 学術情報の探し方(2)
- 第8回 歴史資料のおもしろさ
- 第9回 理工学系研究における図書館利用法
- 第10回 レファレンスツールの上質な使い方
- 第11回 金沢大学の蔵書・資料
- 第12回 科学史研究と図書館
- 第13回 学術情報と研究評価
- 第14回 医学部分館・自然科学系図書館案内
- 第15回 まとめ

としょかん日誌(2005年1月～2月)

1月19日～21日 平成16年度学術情報リテラシー教育担当者研修(大阪大学)巖本康治(参考調査係長)参加

1月27日～28日 アジア情報研修(国立国会図書館関西館)伊川麻里子(雑誌情報係)参加

2月10日 学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト報告会(学術総合センター)内島秀樹(情報企画課課長補佐),守

本瞬(医学情報サービス係)出席

2月17日 平成17年度NACSIS-CAT/ILL講習会実施検討会議及び講師担当者報告会(学術総合センター)守本瞬(医学情報サービス係)出席

2月24日 レファレンス協同データベース実験事業参加館フォーラム(国立国会図書館関西館)巖本康治(参考調査係長),林裕紀子(図書情報係)参加

金沢大学附属図書館報「こだま」第156号

発行：金沢大学附属図書館 編集：広報委員会
〒920-1192 金沢市角間町 電話 076 264-5200

ホームページURL <http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/>

電子メールアドレス etsuran@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

読者の皆様からのおたよりをお待ちしております。

2005年4月1日発行

印刷：株式会社 橋本確文堂

表題地模様©Toku Yusui(加賀友禅染絵『さやぐ、おどる』。由水十久(初代。1913-1988)は金沢出身の加賀友禅作家です。)